

Chon Tejedor, *The Early Wittgenstein on Metaphysics, Natural Science, Language and Value* について

立場 貴文

はじめに

本稿は Chon Tejedor¹ 著 *The Early Wittgenstein on Metaphysics, Natural Science, Language and Value* についての書評である²。本書は前期ウィットゲンシュタイン、とりわけ彼の生前唯一刊行された著作である『論理哲学論考 *Tractatus Logico-Philosophicus*³』（以下では『論考』と表記）における諸問題やそこでウィットゲンシュタインの採っている方法論について論じている。本書での Tejedor の見解は、後述するいわゆる「新しいウィットゲンシュタイン論争 (The New Wittgenstein Debate)」を下敷きにして展開されている (p.1)。

そのため本稿は以下のような展開になっている。まず本書全体の構成を示した後、新しいウィットゲンシュタイン論争について概観し、その後 Tejedor の立場を本書の記述に即したかたちで紹介し、それらに対して評者からの問題提起をおこなう。

1. 本書の構成

本書のねらいと構成は序論の最後にまとめられている (pp.7-9)。まず、本

¹ Chon Tejedor は、12 年間オックスフォード大で講師を務めた後、2014 年から現在に至るまでハートフォードシャー大学の上級講師を務めている。本稿で紹介する著作のほかに、*Starting with Wittgenstein* (2011) なども著している、気鋭の研究者である。

² 以下では、Tejedor (2014) を「本書」、Chon Tejedor を「筆者」と記す。また、本文中にてでくるページ番号は特に断りのない場合 Tejedor (2014) 内の箇所を指す。

³ 本文中で『論考』の本文を引く際は TLP と略記し、そのあとに該当する箇所を示す。また、チャールズ・オグデンによる英語対訳、および野矢茂樹による邦訳を適宜参照した。

書のねらいは新しいウィトゲンシュタイン論争における主要な問題群（『論考』における言語やナンセンスに対するアプローチや、哲学的方法論に関する問題、ウィトゲンシュタインは実在論者なのか観念論者なのかなど）を解決するには、『論考』の言語や論理に関する考察を参照するだけでは不十分であり、上記に加えて形而上学や自然科学、倫理に関する考察を参照することでこれらの問題を解決するというものである。

続いて本書の構成に関してまとめる。本書は全部で6章からなり、それらは大きく分けて4つの部から成るように思われる。

第1章では『論考』の基底的な概念である、命題や思考、音声言語といった表象 (representation⁴) 一般が必然的にもつような特徴は何かを論じている。なんであれ表象が果たさなければならない役割は、それまで知らなかったようなことを既存の表象の配列を変えることで他者に伝達することであると筆者は述べる (p.16)。その役割を果たすために表象が持つ形式を、およそ表象であれば必ず持つことになる必然的な形式と、必ずしも持つことはない偶然的な形式とに分類している。偶然的な形式は、たとえば地図に関して言えばそれが色を持つとか、平面であるなどである。それに対して必然的な形式とは、それが単純な対象から成る相互に独立した表象に論理的に分析可能であることである。さらに内容と形式の先行関係について、それらは互いに相補的であると述べている。

第2章および第3章は『論考』の5.6番台における、いわゆる独我論について論じられている。第2章では『論考』における独我論に関する他の論者の解釈を否定する作業を行う。ラッセル、ショーペンハウアー、マッハの扱った独我論を簡潔に紹介したうえで、『論考』においてウィトゲンシュタインが標的としていた独我論をこれらのいずれかに帰する解釈を否定する。さら

⁴ 本書で筆者は、命題や音声言語、地図や楽譜など広く事態を写像するものに対して表象 representation という言葉を充てている。

に、5.6 番台における「主体 (Subjekt)」に関して、経験的なアプローチ、非経験的なアプローチ、超越論的なアプローチを紹介し、『論考』において主体に関して採用されているアプローチはいずれとも異なると論じる。続く第 3 章では筆者が考える『論考』の独我論がどのようなものか論じられている。

「私の言語の限界が私の世界の限界を意味する」(TLP 5.6) において語られるような「限界 (Grenzen)」を諸表象の可能性の条件としてではなく、可能な思考や可能な事態の総体として解釈することで、これらの独我論的テーゼはトートロジーであることがわかると筆者は述べる (p.75)。さらに『論考』における独我論的なテーゼはトートロジーであるがゆえに、主体は表象の可能性の条件であるといった形而上学的な制約を課すものではないと結論する。

第 4 章と第 5 章は因果や自然科学に関して前期のウィトゲンシュタインがどのような見解を有していたかを明らかにすることに当てられている。第 4 章で筆者は、論理的必然性以外にも必然性はあるという見解、とりわけ因果的必然性が存在するという見解を Causal Necessity View (CNV) と呼び、この CNV は自己反駁に陥ると結論する。そのうえで筆者は自然科学や日常言語における因果的な諸言明をウィトゲンシュタインが排していたわけではなく、それは諸言語のいわば偶然的な形式であると述べる。また第 5 章では論理的な形式、自然科学の形式、日常言語の形式の共通点と相違点を分析する。加えて、『論考』におけるナンセンスとは無目的性であるという本書における重要な主張が展開される。

第 6 章では、『論考』における倫理に関する考察が行われている。この章ではまず標的として前期ウィトゲンシュタインの倫理に関するショーペンハウアー的解釈が紹介され斥けられる。次に筆者の解釈として、『論考』の示す倫理的態度とは記号を論理的に秩序だった仕方でおおうとする性向 (disposition) であるという考えが与えられる。最後に結論部で『論考』におけるナンセンスの解釈、前期ウィトゲンシュタインの哲学的方法論、後期への接続が簡潔

に述べられ本書は閉じられる。

2. 新しいウィトゲンシュタイン論争 the New Wittgenstein Debate

先述したように、本書はここ 20 年ほどウィトゲンシュタイン研究の中心となっている「新しいウィトゲンシュタイン論争」を背景として書かれている。そのため、まず本節でこの論争のそれぞれの立場、主要な問題点を確認する。

この論争は、それまで支配的であったディヴィッド・ペアーズやピーター・ハッカーらの『論考』に関する「形而上学的解釈 (metaphysical reading⁵)」に対して、1990 年代にコーラ・ダイヤモンドやジェームス・コナントらが「決断的解釈 (resolute reading)」あるいは「治療的解釈 (therapeutic reading)」と呼ばれる解釈を提示したことに端を発する。本稿ではこの論争の全体を扱うことはしないが、本書における議論に必要なかぎりの論点を確認していく⁶。まずは形而上学的解釈についてみていこう。

形而上学的解釈の特徴は、『論考』においてウィトゲンシュタインがなんらかの形而上学的な洞察を読者に伝達することを試みていると解釈することである。ウィトゲンシュタイン自身は『論考』の序文でこの著作の目的を「思考されたことの表現に対して限界を引く」(TLP 序文) ことによって哲学的諸問題を解決することであると述べている。そしてその解決は、問題に対する解答を与えることによってではなく、哲学的諸問題が誤解に基づくものであることを示し問題がそもそも存在しなかったことを気づかせることによってなされる。すなわち、言語の限界の外側がただナンセンスであることを示すことによってなされる。さらに『論考』は「私を理解する人は、私の命題を通り抜け——その上に立ち——それを乗り越え、最後にそれがナンセンス

⁵ Pears (1987)、Hacker (1972) に帰せられる。

⁶ 新しいウィトゲンシュタイン論争に関する詳細な議論は、吉田 (2009) や同 (2016)、Crary and Read (2000) や Read and Lavery (2011) を参照。

であると気づく。(…)私の諸命題を葬り去ること。そのとき世界を正しく見るだろう」(TLP 6.54)、そして「語りえぬものについては、沈黙せねばならない」(TLP 7)という言葉で締めくくられる。したがってこれらの言葉を深刻に受け止めるならば、存在論や独我論といった形而上学に関して何かポジティブな主張が『論考』の本文においてなされていると考えることはできない。

しかし形而上学的解釈者はこうした「語りえる／語りえない」という区別とは異なる水準を持ち込むことで、『論考』からポジティブな形而上学的洞察を読み込もうとする。それが「示し」の水準である。すなわち、有意味な仕方では語りえないが、異なる仕方によって形而上学的洞察が読者に示される、というのである。形而上学的解釈者たちがそうした読解のテキスト上の根拠とするのは主として『論考』の以下の箇所である。

4.114 哲学は思考可能なものを境界づけ、それによって思考不可能なものを限界づけねばならない。

4.115 哲学は、語りうるものを明晰に描写することによって、語りえぬものを指し示そうとするだろう。

4.1212 示されうるものは語られえない。

こうした記述を元に、形而上学的解釈者たちは『論考』は言語や思考の限界を境界付けることによって語りえないものを示す書物であるとし、ウィトゲンシュタインに実在論や観念論、独我論などを帰することになる。

これに対して決断的解釈者たちは論考の序文と結論を深刻に受け止め、形而上学的解釈者たちのようにポジティブな見解を読み込むことは誤りだと批判する。形而上学的解釈者によれば、有意味な命題のほかに、ナンセンスで

はあるが語りえないものを指し示す命題と端的に意味を欠く無意味な命題が存在することになるが、決断的解釈者はこうした区別を拒絶し、有意味な命題のほかには何も語っておらず何も示していない単なるナンセンスな記号の集まりがあるだけだと指摘する。これは『論考』全体にも当てはまり、したがって 6.54 で述べられているように『論考』がナンセンスであるとすれば、決断的解釈によればそれはなんらポジティブな洞察を読者に提供するものではない。では決断的解釈者にとって『論考』が果たす役割とは何なのだろうか。

決断的解釈によれば『論考』の諸命題は、一見すると形而上学的な洞察を含んでいるように見えて端的にナンセンスである。しかしそうした命題を見た私たちは、それに引き寄せられ、そこになんらかのポジティブな見解を読み取ろうとする。そしてついにはそれが不可能であることを悟るのである。こうした過程をたどることで、『論考』の読者は様々な哲学的な言説が端的にナンセンスであることを悟り、「治療」される。

この解釈を採るメリットは、『論考』の倫理的目的と関係する。ウィトゲンシュタインは、『論考』の出版交渉の際に編集者フィッカーへ宛てた手紙の中で下記のように記している。

私は一時期、今はない一文を序文に付け加えようと考えていました。この文をあなたに書き送ろうと思います。私が書こうとしたのは、次の文です。「私の著作は、二つの部分からなっている。一つはここに提示されている部分であり、もう一つは、私が書かなかった部分である。そして、まさにこの第二の部分こそが重要なのである」。私の本においては、倫理的なものは、いわばその内側から境界づけられるのです⁷。

⁷ von Wright (1982)

上記の引用によれば『論考』には書かれなかった重要な部分があり、そしてその部分は倫理に関わるものであることが推測される。したがって『論考』の整合的な解釈はこの「書かれなかった部分」が何なのかを指摘し、それが『論考』の倫理的な目的とどう関係するのかを提示する必要がある。

加えて、「倫理的なもの」に関してはほかに参照すべき箇所がある。『論考』の多くの箇所が言語や論理に関する考察からなるのに対して、6 番以降は論理学、数学、自然科学などに関するコメントのようになっており、とりわけ『論考』の 6.4 番台は一見すると倫理に関して論じているように思われる。

6.4 すべての命題は等価値である。

6.41 世界の意義は世界の外になければならない。(…) 世界の中に価値は存在しない。

6.42 それゆえ倫理学の命題も存在しえない。命題はより高い次元をまったく表現できない。

フィッカーへの手紙によれば「倫理的なもの」は『論考』本文においては書かれなかったはずである。それゆえ 6.4 番台の倫理的な章句と「書かれなかったもの」、「倫理的なもの」との関係がどのようなものであるかを整合的な仕方で提示しなければならない。

決断的解釈は「書かれなかったもの」はウィトゲンシュタインの治療的目的であり、これがまた『論考』の倫理的な目的であるとする。さらに、決断的解釈者は『論考』の本文すべてを単なるナンセンスであると解釈するため、6.4 番台の倫理的章句もまた、それが一見倫理に関して何事かを語っているように見えて実は何も語っておらず、この箇所が他の箇所と比べて倫理的目

的についてより重要な役割を果たすことはないと論じる。

他方、形而上学的解釈では「書かれていないもの」は『論考』の諸考察において語りえないが示されるような形而上学的諸洞察ということになるだろう。しかしそうすると『論考』の 6.42（上記引用）で言われているように命題は倫理をまったく表現できないのだから、「示し」によってすら倫理的洞察を読者へ伝達することはできないように思われる。したがって形而上学的解釈者は 6.4 番台を切り捨てることになり、『論考』全体の首尾一貫した解釈を提示できないという点で魅力を欠くことになる。

さて、ここまでの議論をまとめると、形而上学的解釈と決断的解釈の係争点が明らかになる。すなわち、『論考』の諸命題は端的にナンセンスなのか、あるいは語りえないが示しうるような何事かを読者に伝達しているのか。そこから派生して、ウィトゲンシュタインは『論考』において何か哲学的、形而上学的な洞察をポジティブに提示しているのかどうか。そして『論考』において書かれなかったもの、倫理的なものは何か。また 6.4 番台の「倫理的章句」の果たす役割とは何か、である。

本書は新しいウィトゲンシュタイン論争を背景としているが、この論争のどちらの側がより見込みがあるかという評価を行っているわけではない。ただし、この論争において問題となる幾つかの論点に関して部分的に解決を与えることを試みている。それは評者の解するところでは主体、ナンセンス、そして倫理に関する問題である。次節以降では、より詳細に筆者の議論を追い、それらをいかにして解決しているかを明らかにする。

3. 『論考』における独我論の問題——「主体」概念の解釈——

『論考』の 5.6 番台は以下のような考察から始まる。

5.6 私の言語の限界が私の世界の限界を意味する。

5.6 から 5.641 にいたる一連の考察は独我論について論じられている箇所として知られており、またその解釈に関しては多くの論争がなされてきた。その理由の一つは、この箇所が言語や論理を扱っている 1 番から 5 番までの命題の最後に位置しており、またその次の 6 番台においては倫理的章句や数学などが扱われていることもあり、この箇所が『論考』全体のターニングポイントであると考えられているからだろう。

この箇所の代表的な解釈は、前節で述べた新しいウィトゲンシュタイン論争における形而上学的解釈者の代表格の一人である P.M.S.ハッカーによる、『論考』のとりわけ 5.6 番台における「主体」は、思考や言語といったあらゆる表象の可能性の条件、つまり超越論的条件であるという解釈である⁸。これに対して筆者は『論考』においてウィトゲンシュタインが扱っている主体はそうした条件ではないと主張している。

本稿第 1 節でも述べたように、本書の第 2 章および第 3 章は『論考』5.6 番台に関するものである。第 2 章は他の解釈を否定しており、その過程で「主体」に関して、筆者が考える正しい解釈が満たすべき条件というものが提示されている。

第一の条件はそこで扱われる主体が単純なものでなくてはならないということである。言い換えればこれは、主体が複合物であってはならないということである⁹。第二の条件はそれが世界内の対象であってはならないということである。最後に第三の条件は、主体は形而上学的条件であってはならないということである。これらを踏まえた筆者の解釈はどのようなものだろうか。

⁸ Hacker (1972) ch.3

⁹ 『論考』において、単純な対象とは命題や像にあらわれる要素のうち、それ以上論理的に分析できないものである。たとえば「ビートルズは日本に来た」という命題は、「ビートルズ」や「日本」といった要素からなるが、ここで「ビートルズ」は複合物である。というのも先の命題は「『ジョン・レノン』は日本に来た」かつ「『リング・スター』は日本に来た」かつ…という命題へと分析可能だからである。

それは主体、とりわけ『論考』5.633 で言われる「形而上学的主体」を「可能な思考の総体」と同定することである。たしかにこの解釈は先に筆者が挙げた条件を突破するように思われる。可能な思考の総体それ自体は複合物ではないだろうし、また通常の意味での世界内の対象ではないだろう。また形而上学的主体でもない。ただ筆者が想定している疑問として、可能な思考の総体を形而上学的主体と同定することは妥当なのかという問題が残る。この問いに対して筆者は二つの論拠をもって自説を擁護している。

ひとつめの論拠は比較的簡潔である。ウィトゲンシュタインは問題となっている独我論の一部で以下のように述べている。

5.641 それゆえ、哲学において、自己について心理学的にではなく論じうる意味が、確かにある。

自己は、「世界は私の世界である」ということを通して、哲学に入り込む。

(…) それは形而上学的主体、すなわち世界の——部分ではなく——限界なのである。

引用した箇所によれば、哲学は自己（＝形而上学的主体）に関して論じることができるはずである。しかし、たとえば形而上学的解釈のようにここでの自己を語りえないものとする、ウィトゲンシュタインの記述と矛盾することになると筆者は述べる（p.75）。さらに、5.641 の最後の文は、超越論的に解釈するのではなく、形而上学的主体が単に特定の思考に限定されるわけではないと解釈すべきだと述べている。

形而上学的主体を可能な思考の総体と同一視する解釈の第二の論拠はもう少し複雑である。筆者によれば彼女の解釈を採ることで、ウィトゲンシュタインが独我論を「まったく正しい」と考えていたことがうまく説明できると言う。

5.62 この見解¹⁰が、独我論はどの程度正しいかという問いに答える鍵となる。

すなわち、独我論の言わんとするところはまったく正しい。ただ、それは語られえず、示されているのである。

世界が私の世界であることは、この言語（私の理解する唯一の言語）の限界が私の世界の限界を意味することに示されている。

ここで「独我論の言わんとするところ」とは「世界が私の世界である」というテーゼであろう。ウィトゲンシュタインによればこのテーゼの正しさは「私の言語の限界が私の世界の限界を意味することに示されている」という。したがって「私の言語の限界が私の世界の限界を意味する」という命題をまづみる必要があるだろう。

さて、上でも述べたように筆者によれば「限界」という語は超越論的な条件としてではなく、主体に関しては可能な思考の総体として解釈するべきであった。この発想を敷衍すれば私の言語の限界は私の言語の可能性の総体として解すべきである。それゆえ私の言語の可能性の総体は有意味な命題の総体ということになる。他方、世界のほうに当てはめると「世界は成立している事柄の総体」(TLP 1)であり、世界の限界は世界の可能性の総体である。筆者はウィトゲンシュタインが独我論ということと言おうとしているのは「世界は私の世界である」というテーゼであると考えている (p.76)。ここで筆者は先に述べた限界に関する考えを敷衍している。つまり世界とはここでは可能性の総体であり、私の世界は思考の総体であると考え、「世界は私の世界である」は「可能性の総体は可能な思考の総体である」という風に置

¹⁰ ここで「この見解」と呼ばれているのは 5.6（すでに上で引用している）と解釈する。Hintikka (1958) や Pears (1987) ch.7などを参照。

き換えることができる。そしてこのテーゼはトートロジカルに正しいと筆者は述べる (p.76)。こうして、ウィトゲンシュタインが独我論を正しいと考えていたのはそれがトートロジーであると言う意味においてなのであると結論する。

とはいえ筆者によればこの主張はまさにトートロジーなのであって、なにが形而上学的な、実質的な主張を私たちに課すわけではないということに注意する必要がある。また、「世界は私の世界である」というテーゼが正しいにもかかわらず、それが「語られえない」のはトートロジーだからである。

4. ナンセンスに関して——無目的としてのナンセンス——

本書の自然科学に関する箇所、第4章と第5章で筆者は有意味、無意味、ナンセンスの従来の区別に対して新たな解釈を提案している。『論考』において有意味な命題とは、可能な事態を写し取ったものであり、真理値をもち、その命題が真であるとか偽であるということは情報をもつ。これに対して無意味な命題とは典型的にはトートロジーと矛盾である。これらは常に真であるか、常に偽である。こうした命題はどういう事態が現に成立しているかということに関して一切情報を持たない。最後にナンセンスはそのいずれでもないもの、たとえば「、家 ある ぶー 上 日本語 の」といった記号の集まりである。

さて、新しいウィトゲンシュタイン論争において形而上学的解釈者によれば、ナンセンスの中には「語りえないが示される」ような哲学的洞察を私たちに伝達するものがあり、とりわけ『論考』の諸命題がそれに当てはまるのであった。他方、決断的解釈者はそうした類のナンセンスを認めず、したがって『論考』もまた端的にナンセンスであると主張していた。

筆者はこうした区別に対して、目的性という考えを導入することでナンセンスを別様に解釈しようとしている。このようにナンセンスを解釈するため

に筆者は、ウィトゲンシュタインの因果や自然科学に関する考察を参照している。

第4章で筆者は、論理的必然性以外の必然性、とりわけ因果的必然性があると言う見解（Causal Necessity View: CNV）をウィトゲンシュタインに即して、それが自己論駁的であるとして退ける（pp.97-99）。つまりある種の命題は論理的に必然的に真でありうる（「 p ならば p 」など）が、因果的な命題はそのような意味での必然性をもち得ない。しかし、ウィトゲンシュタインは因果的必然性という考えは認めなかったものの、因果的な諸言明（「出来事 p が起これば必ず別の出来事 q を引き起こす」のような）を用いることを禁止しようとしたわけではなかったと論じる。

科学的な法則に関する言明は、上に言ったような意味では必然的に真であるわけではない。また法則は実在の像でもない。この意味で科学法則は、トートロジーでもなければ有意味な命題でもない。こうした法則が果たす役割を、筆者はある体系において有意味な命題を生み出すための「指示書き（instruction）」であると述べている（p.109）。

例えば、互いに外的な関係¹¹にある二つの命題 p と q について、「 p が q を引き起こす（ p causes q ）」という命題の真理表は、「 p かつ q 」という連言命題の真理表と同じであることがわかる¹²。したがってここで「を引き起こす」といった言い回しは論理的には何の意味もなしていない。

ところがあらゆる連言命題が因果的な命題かといえは必ずしもそうではない。「昨夜の豪雨が下流の氾濫を引き起こした」という命題は、「昨夜大雨が降った」と「川の下流が氾濫した」の両方が真である場合に限り真であるし、これは前者と後者の因果的な関係を扱っている有意味な命題である。これに

¹¹ ある命題と別の命題が外的な関係にあるとは、ここでは一方の真偽が他方に依存しないことを指す。逆にたとえば $\neg p$ と p は内的な関係にあると言える。

¹² ここで「 p が q を引き起こす」という命題の真理表が「 p ならば q 」と一致しないことに注意すべきである。後者は p が偽である場合にも真であるが、前者は p が偽であれば偽だろう。

対して「昨夜の私の飲酒が下流の氾濫を引き起こした」は、たとえ「昨夜私はアルコールを摂取した」と「川の下流が氾濫した」の両方が真であっても、真ではない。この意味で「昨夜の私の飲酒が下流の氾濫を引き起こした」は因果的な命題ではない。因果というものが認められるのはこの場面においてである。すなわち、因果法則というのはあらゆる連言命題の中から、そのうちの一部を妥当な因果的な命題として扱うべし、という指示書きなのである。

あらゆる科学法則はこの意味で指示書きである。古典力学の体系はあらゆる命題のうち特定のものを有意味なものとして扱うべしと指示するし、量子力学の体系も同様である。こうした諸法則は、それぞれ私たちの生活の必要に合わせて選択可能なものである。つまりこれら法則は、私たちの生活を円滑にするという目的を持って選択される。

ここまでの議論から、従来の有意味、無意味、ナンセンスの区別とは異なる区別を得ることができる。科学法則のような記号の組み合わせは有意味でも無意味でもないが、何らかの目的に資するという意味で、ナンセンスではない。ウィトゲンシュタインにとって真正のナンセンスとは、一切の目的に資さない、有意味でも無意味でもない記号の組み合わせであり、このようなナンセンスの典型例は形而上学的な命題であると筆者は結論する。

5. 倫理に関して

前期ウィトゲンシュタインの倫理に関する筆者の理解は、主体に関する理解と密接に関わっている。まず筆者が第6章で退けるのは、主体が倫理的な価値の条件であるという見解であり、これを筆者はショーペンハウアー的解釈と呼ぶ (p.140)。このような解釈は『論考』の以下のような箇所を根拠とする。

6.423 倫理的なものの担い手たる意志については語ることはできない。

他方、現象としての意志はただ心理学の興味を引くに過ぎない。

6.43 善き意志、あるいは悪しき意志が世界を変化させるとき、変えうるのはただ世界の限界であり、事実ではない。(…)

ひとことで言えば、そうした意志によって世界は全体として別の世界へと変化するものでなければならない。いわば、世界全体が弱まったり、強まったりするのでなければならない。

筆者がショーペンハウアー的解釈を退けるのには主に二つの理由がある。第一の理由は、独我論の箇所でも述べたとおり、『論考』のウィトゲンシュタインは倫理であれ表象であれ、そうしたものを可能とする超越論的条件としての主体概念を放棄していると考えるべきだということである。第二の理由はフィッカーへの手紙にも書かれていことから、『論考』の本文は倫理に関して沈黙しているとみなすべきであり、上記のような箇所によってその倫理的目的が達成されていると考えるのは妥当ではないことである。

このような論の進め方から、筆者は『論考』のウィトゲンシュタインは超越論的な条件としての主体を価値の源泉とみなしていないこと、『論考』の倫理的目的は本文のいわば外側で達成されていると考えていることがわかる。

これを受けて筆者は、『論考』の倫理的目的はその全体的な目的と深く関わっていると指摘する。さて、『論考』の目的は序文によれば、言語に限界を引くことによって、思考に限界を引くことであつた。これは、思考や命題にとって必然的なものは何なのかを明らかにすることで達成されると筆者は述べる。そしてその解明の過程で、読者は記号を秩序だった仕方で運用する実践的能力を「チューニングされる」という。

論理や言語の探求の過程で読者の能力がチューニングされることと倫理に何の関係があるのだろうか。たとえば読者は論理的必然性以外に、一切必然

性はないと気づくことで、あらゆる事実の成立の根本的偶然性を悟る。そしてどの事実の成立も「等価値」であることに気づくのである。あらゆる事実、命題を対等に扱うことが倫理的態度の表明であると、筆者は結論する (p.148)。

筆者によれば、あらゆる事実を対等に扱うというという意味での倫理的態度は、命題によっては語りえない。というのも、それはただ記号を明晰な仕方
方で運用するということであり、ナンセンスによって（ショーペンハウアー
的解釈のような）倫理的な洞察を伝達しようとする試みは倫理的態度に反す
るからである。

では倫理的な章句が並ぶ 6.4 番台を『論考』に配したウィトゲンシュタイ
ンの意図とはいったい何なのだろうか。当然、倫理的な洞察を伝達すること
ではないはずである。筆者は、6.4 番台は読者の「言語的筋肉」のエクササイ
ズのためにあるのだろうと述べている (p.152)。すなわち、それ以前の箇所
を読むことで、読者はすでに記号を秩序だった仕方で扱うという明晰さを獲
得しているはずであり、そうであれば 6.4 番台のような記号の組み合わせを、
多様な仕方で読むことができるはずである。

筆者は「死によって、(…) 世界は終わるのである」(TLP 6.431) を例に出
している。ここでの死を超越論的な主体の死と読めば、先の箇所はナンセン
スである。また経験的な知覚の主体の死によってその主体の世界が終わると
読めば、それは無意味なトートロジーである。さらに、ある人の死によって
世界が消えてなくなると読めば、それは有意味ではあるが偽なる命題と読ま
れうる。肝心なのはいずれの読みによっても、倫理学的洞察は伝達されな
いと気づくことなのである (p.152)。

ここまで、筆者による『論考』の新たな解釈について見てきた。次節では
紙幅の都合上ごく簡潔にはあるが、評者自身による問題提起を試みたい。

6. 問題提起

前節まで見たとおり、本書は主体、ナンセンス、倫理に関して、これまでの論争とは異なる仕方で光を当てるよう試みている。ここからはそれぞれについて評者自身からささやかながら問題提起をすることにしたい。

まず、主体に関してだが、評者には少なくとも二つの問題があるように思われる。筆者によれば、独我論のテーゼ「世界は私の世界である」が正しいのは、可能な事態の総体が可能な思考の総体と一致することがトートロジカルに正しいからであった。そしてこれがトートロジカルに正しいのは、両者が論理形式を共有しており、それぞれ互いに独立な要素命題と要素像へと分析可能だからである。しかし、必ずしもこのようにいえるかどうかは疑問が残る。

加えて、5.6 番台を主体一般に関する議論と捉えることで、それが独我論であるということのエッセンスを逃してしまっているように感じる。逆に言えば、他の主体＝「他の可能な思考の総体」はどのように扱われるだろうか。それはあらかじめ思考の外に位置しているように思われる。この意味で、可能な思考の主体は唯一のものだと言うこともできるが、こうした箇所意識を割いているようには思われない。

次にナンセンスに関して、有意味な命題と無意味な命題、そしてナンセンスという従来の区別に対して、目的性という考えを導入することで筆者はこれまでのナンセンスの領域を（科学法則といった）指示書きと目的を欠く端的なナンセンスという二つに分けたのであった。

一見すると、上述の分類によって形而上学的な諸命題と科学法則をうまく位置づけられるように思われる。しかし、筆者のこうした分類は『論考』の記述それ自身を適切に扱うことができるかという点で疑問が残る。一方でウィトゲンシュタイン自身は『論考』の 6.54 で、彼の命題はナンセンスであり、それらは「投げ棄てられる」と述べている。他方、筆者が述べるように『論考』全体が、秩序だった仕方で記号を扱う私たちの実践的能力をチューニン

グするという目的を持つならば、それは筆者自身の分類で言えば真正のナンセンスではないということになる。目的を持った「指示書き」として『論考』を解するならば、それは投げ棄てられるのではなく私たちの実践に資するものであり続けるだろう。この意味で、『論考』の 6.54 と筆者の解釈には乖離があるように思われるし、この乖離に筆者は答える必要があるだろう。

最後に倫理について、評者には少なくとも二つの疑問が残った。第一に、本書では秩序だった仕方で記号を扱う態度が、論理的のみならず倫理的であるという結論に至った。しかし、こうした態度が「倫理的」であるというのはあまり一般的な言い回しではないだろう。であるならば、そうした態度や性向がどのような意味で倫理的なのかということを筆者は説明すべきだろうが、それに応答するような記述は本書には見られなかった。

第二の疑問として、『論考』以外のウィトゲンシュタインとの整合性という点がある。とりわけウィトゲンシュタインは 1929 年に『倫理学講話“A Lecture on Ethics”』において倫理について論じている。そこでは倫理を表現しようとする場合、私たちはナンセンスな表現に陥らざるをえず、またそのことが倫理にとって重要なのだと述べている¹³。こうしたウィトゲンシュタインの見解は、本書での筆者の倫理に関する見解とずれがあるように思われる。少なくとも『倫理学講話』でのウィトゲンシュタインの発言をまじめに受け止めるならば、『論考』の 6.4 番台における倫理的章句が私たちの論理的実践能力の、いわば「練習問題」として読者に提示されていると考えるのはいささか早計であるように思われる。

とはいえ、本書はこれまでの『論考』をめぐる論争に新たな光を当てる著作であることは間違いない。また、本書および本稿で挙げられているような諸問題は、評者自身が今後取り組むべき問題でもある。

¹³ Wittgenstein (1929) p.11

参考文献

Crary, Alice & Read, Rupert (ed.) 2000, *The New Wittgenstein*, Routledge, London & New York

Diamond, Cora 2000, “Ethics, imagination and the method of Wittgenstein’s *Tractatus*”

Hacker, Peter, M.S. 1972, *Insight and Illusion*, Oxford University Press

Hintikka, Jaakko 1958, On Wittgenstein’s ‘Solipsism’; *Mind*, Vol.67, pp.88-91

Pears, David, F. 1987, *The False Prison* Vol.1, Oxford University Press

Read, Rupert & Lavery, Matthew, A. (ed.) 2011, *Beyond the Tractatus Wars: The New Wittgenstein Debate*, Routledge, London & New York

Tejedor, Chon 2014, *The Early Wittgenstein on Metaphysics, Natural Science, Language and Value*, Routledge

Wittgenstein, Ludwig 1922 (1981) , *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge, London

(=2003, 野矢茂樹訳『論理哲学論考』, 岩波文庫)

———, 1929 (1965) , “A Lecture on Ethics,” *The Philosophical Review* 74, no.1, pp.3-12

von Wright, Georg, H. 1982, *Wittgenstein*, BlackWell

吉田寛, 2009, 『ウィトゲンシュタインの「はしご」』, ナカニシヤ出版

———, 2016, 「「はしご」としての『論考』の読み方と哲学の可能性」,
『これからのウィトゲンシュタイン——刷新と応用のための14篇——』(編:
荒畑靖宏、山田圭一、古田徹也), pp.19-32, リベルタス出版

(たてば たかふみ 京都大学大学院 文学研究科 修士課程)